

# 1. 国立保健医療科学院 設立20周年記念式典

日 時：令和4年12月15日（木） 13時00分～13時30分

会 場：国立保健医療科学院 別館棟 講堂（オンライン配信）

<次第>

I 主催式辞	曾根智史	国立保健医療科学院長
II 来賓祝辞	福島靖正氏 内田勝彦氏 吉村和久氏 松谷有希雄氏 柴崎光子氏	厚生労働省医務技監 全国保健所長会会長 地方衛生研究所全国協議会会長 日本公衆衛生協会理事長 和光市長
III 来賓紹介	林 謙治氏 宮寄雅則氏	医療法人一秀会理事 医療法人社団健育会理事

## I 主催式辞

### ○ 曾根智史（国立保健医療科学院長）

開会にあたり、院長の曾根より一言御挨拶を申し上げます。本日、国立保健医療科学院設立20周年記念式典及びシンポジウムを開催できることを大変ありがたく存じます。

新型コロナウイルス感染症対策として、この会場には御来賓の皆様と科学院職員のみ御参集いただき、多くの方にはオンラインでの参加とさせていただきます。この点何卒御了解いただければと存じます。にもかかわらず、年末のお忙しい中、多くの皆様に御参加いただいていること、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

本日この日を迎えることができますのも、厚生労働省や全国の地方自治体の皆様、地元の和光市、埼玉県の皆様、関係団体、職能団体、大学、研究機関、関連学会の皆様など、科学院を支えてくださった多くの方々のおかげと、深く、深く感謝申し上げます。

特にこの20年間、本院で研修を受けてくださった保健医療福祉領域で働く全国の皆様には心より感謝申し上げます。

また、この20年間、科学院を内側から支えてくださった科学院の旧職員の皆様、そして全ての現職員の皆様に改めて御礼申し上げます。

一口に20年と申しますが、科学院にとってこの20年は必ずしも平坦な道のりではありませんでした。三つの組織が一緒になって業務を進めていく産みの苦しみ、行政刷新会議による事業仕分けとその後の組織再編・研修再編は、まさに乗り越えなければならぬ大きな山でした。

また、東日本大震災や今回の新型コロナウイルス感染症、様々な社会情勢の変化も科学院に大きな影響を及ぼしてきました。しかし、それらの出来事が科学院をより良い、より強い組織にしたのもまた事実であると思います。この20年間、科学院を指揮してこられ、ここに御来場の歴代院長の皆様に深く敬意を表します。

残念ながら初代院長の小林秀資先生、第2代院長の篠崎英夫先生は既に鬼籍に入られましたが、当時の資料を読みますと、科学院の基礎を築くためにこのお二人がどれだけ奮闘されたのかを知ることができます。これまでの科学院の歩みと今後の展望についてはこの後の私の講演で詳しくお話したいと思います。

わが国の公衆衛生は保健師、医師、歯科医師、管理栄養士をはじめとする多くの専門職と事務官の方々に支えられています。公衆衛生分野で働く者は皆、日々新しい知識や技術を修得し、実務に生かすことを求められています。科学院が調査研究を生かした養成訓練という手段を用いて全国の皆様の研鑽に貢献できることは、科学院の大きな特徴であり、喜びであり、確かなアイデンティティであると信じております。この使命を堅持し、次の20年間も引き続き国民の皆様が安全・安心に生活できる社会の実現を目指して、職員一同、一層の努力をまいります。科学院の底力を見ていただき、皆様、今後とも御指導、御支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、本日の式典、記念シンポジウムの実現に御尽力いただいた数多くの皆様に感謝して、私の挨拶といたします。本日は本当にありがとうございました。

## II 来賓祝辞

### ○ 福島靖正氏（厚生労働省医務技監）

ただいま御紹介をいただきました。厚生労働省で医務技監をしております福島でございます。院長経験者ということで、一言お祝いの言葉を申し上げたいと思います。

## 1. 国立保健医療科学院 設立 20 周年記念式典

まず科学院 20 周年、誠にありがとうございます。もちろん科学院は、その前身である国立公衆衛生院、国立医療・病院管理研究所、あるいは感染研と長い歴史があるわけでありましたが、科学院としては 20 年ということで、まだまだ研究所としては若い研究所であると思います。ただ、この 20 年間、本当に様々なことがございました。先ほど曾根院長からの御挨拶の中にもありましたが、特に事業仕分けのときには皆さん非常に大変な思いをしたと思います。そういう中でこれまで養成訓練、それから研究といったことを通じ、さらにはそれを支える事務の皆さんがこの 20 年間頑張ってきたおかげで今日の科学院があると考えております。

科学院がほかの試験研究機関と大きく異なっている点は、公衆衛生、あるいはそれに関連する社会福祉の地方自治体職員等の人材育成、養成訓練を行う場所であるということだと思います。保健医療福祉行政は人が行うものでありますので、より良い人材が常に求められます。そういう人材をどう養成するか、これは本当に保健福祉医療行政を進める上では非常に重要な課題であります。そういう面で、科学院が担っている役割は今後ますます重要になると考えております。

もちろん今後地方自治体職員だけではなく、厚労省の職員も含めて質のレベルアップを図っていく必要があるというふうには私と考えておまして、将来的にはそういう研修もここで企画していただけるようになればと考えております。

さて現在一番の課題はコロナであります。新型コロナウイルスの対応の中で、実はいろいろと明らかになってきた問題があるわけですが、これはコロナになったから起こってきたものではなくコロナ以前から存在していた様々な問題が顕在化してきたと思います。

例えば、地方自治体における保健医療行政の在り方、迅速な分析をするための情報の集め方、医療DX、かかりつけ医の役割、入院医療体制、医療機関における感染管理、病棟の在り方や病室の在り方、高齢者施設における管理の在り方、医療の提供の在り方、換気の問題があります。このように非常に多くの問題がコロナ以前から存在したわけですが、コロナを通じて非常に顕在化してきたというように思います。こういう問題に対する解決方法を、研究を通して明らかにしていただく、これもまた科学院の大きな役割だと考えております。

科学院は私にとって非常に特別な場所です。私は科学院の前身である旧国立公衆衛生院の専門課程の修了生であり、公衆衛生院で社会人としてのキャリアの最初の 3 年間を過ごさせていただきました。また、科学院では院長もさせていただき、皆様方と一緒に仕事をさせていただいております。これまでのここでの経験が、私のこれまでの仕事、現在の仕事の基礎となっており、これらができる力をつけてくれたところがこの場所であると思います。

科学院がこれからますます発展をして、我が国における保健医療福祉の向上のために不可欠な場所であり続けることを心から祈念申し上げますとともに、本日御参会の皆様方の御健勝、御活躍を祈念いたしまして私からの挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

### ○ 内田勝彦 氏 (全国保健所長会会長)

皆様、こんにちは。私は全国保健所長会で会長を務めさせていただいております大分県東部保健所の内田と申します。このたびは設立 20 周年を迎えられ、誠にありがとうございます。この日を迎えることができましたことは、ひとえに曾根院長先生を初め職員の皆様方が並々ならぬ御尽力をされた結果であろうというふうにお喜びを申し上げます。

また、晴れの記念式典にお招きいただきまして大変光栄に思っております。ありがとうございます。

一口に 20 年と申しますが、昨今のように社会情勢や国際的な状況も非常に変わって諸制度も目まぐるしく変わっております中で、このような教育・訓練機関が長年運営されているということには並々ならぬ努力があったのではないかと思います。

貴院におかれましては、毎年私も参加させていただいておりますが、評価というものを受けられて、その上で研修事業であるとか、あるいは研究事業といったものを見直していただき、非常にレベルアップをされているということが貴院の発展に大きく寄与しているのではないかと考えております。

私は平成 8 年に臨床から行政のほうへ入ってまいりましたが、翌平成 9 年に保健医療科学院の前身であります公衆衛生院で、いわゆる保健所長研修というものを受けさせていただきました。その中で公衆衛生の何たるかというものをつかまされた者であります。ちょうどその頃、曾根院長先生も公衆衛生にお見えになった頃であります。

私ども保健所職員にとりまして、この科学院というのは研修を受ける非常に大切な機関でありまして、今後もぜひよろしくお願ひしたいと思います。

今般のコロナ禍におきましては、各保健所とも非常に地域住民の命と健康を守るために必死にやっておりますけれども、慢性的な人員不足ということがどうしてもありまして、各保健所とも研修に職員を派遣することが非常に難しくなったような状況であります。そのような中、保健医療科学院におきましては研修中にオンラインをたくさん取り入れていただくなど、現場のニーズをくみ上げていただき大変有り難く思っております。このように健康危機管理に没頭している中でも少しでも時間を作ってこのような研修を受けることは私どもにとって大変大切な時間です。

また、このような場所に来て全国の仲間と意見交換や情報交換ができるのは非常に貴重な機会です。今後も引

き続き保健所職員の人材育成にぜひ御尽力いただければと思っております。

貴院の20年の御発展は、これまで築かれてきた伝統、また、すばらしい人材、また、公衆衛生人材の育成に対する使命感、そのようなもので成されてきたものだろうと思っております。どうか貴院がこれからも伝統を生かし、人材を生かしながら、さらなる発展を遂げられますことを祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

#### ○ 吉村和久氏 (地方衛生研究所全国協議会会長)

ただいま御紹介にあずかりました地方衛生研究所全国協議会会長を務めております東京都健康安全研究センターの吉村でございます。本日はこのようなすばらしい記念式典にお招きいただきまして厚く御礼申し上げます。国立保健医療科学院は設立20周年を迎えられ、誠にありがとうございます。この日を迎えることができたのは、ひとえに今おられます歴代の科学院長、そして現曾根科学院院長並びに職員の皆様方の並々ならぬ御尽力の成果とお喜び申し上げます。僭越ではございますが、これまで大変お世話になっております地方衛生研究所全国協議会を代表しまして一言御挨拶を述べさせていただきます。

改めて国立保健医療科学院の沿革というものを紐解いてみました。当時の厚生省の国立試験研究機関の重点整備、再構築の一環として平成14年4月に旧国立公衆衛生院、旧国立医療・病院管理研究所の多くの組織機能を統合し、これに国立感染症の口腔科学部を加え、新たな機関としてここ和光市に設置されたとあります。その後、何度か組織体制の変更があり、6統括研究官、6研究部、2センターで現在に至っているということが書いてありました。行っている研究課題は健康増進に関わる研究、保健医療福祉サービスの研究、そして生活環境、安全に関する研究であり、これらに関して人材育成と調査研究に取り組んでいるとされております。

さて、こう見てみますと、設立当初から将来を見越していたのではないかとしか思えないように、今まさに必要とされている研究が全てギュッと詰め込まれているような気がしてなりません。今回の新型コロナ禍での危機管理に関してもこれまでに蓄積された本院での研究成果が活用されておりますし、今後ますます重要となると考えられる高齢者福祉保健やSDGs、そしてグローバルヘルスの研究などもかなり以前から組織的に取組がなされておりました。我々、地方衛生研究所全国協議会とのつながりも深く、地衛研の在り方の検討も一緒にさせていただいております。

このように本院での研究成果は、これまでも、そしてこれからも、日本の保健医療及び福祉の指し示す指針となることは明白でございます。世界に先駆けて進んでいる少子高齢化、環境問題、世界的なパンデミックの頻発などなど、考えただけで我々が解決しなければいけない課題は山積しております。そのための種を、特にシステムと人材を、この20年間育ててきた本国立保健医療科学院は、今からその果実を収穫する時が来ているというふうにも言えると思います。

また、これも先を見据えていたとしか思えませんが、世界で今提唱されているワンヘルスの考えは設立当時からこの科学院の基本理念として背骨のように貫かれている気がしてなりません。

最後に、これからも今まで以上に未来を見据えた調査研究と人材育成に邁進していただけたらと心から思います。地全協もできる限りの協力を惜しみませんので今後ともよろしくお願いいたします。

以上、簡単ではございますが、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

#### ○ 松谷有希雄氏 (日本公衆衛生協会理事長)

松谷でございます。御紹介がありましたように、今、日本公衆衛生協会におります。当院の4代目院長です。本日は国立保健医療科学院の20周年の記念の会にお招きいただきましてありがとうございます。20周年を迎えられて、このような会が持てますことをお喜び申し上げます。

20周年といっても、先ほどのお話にもありましたように国の試験研究機関の統合の成果として始まったものでございますので、その前身の各機関、公衆衛生院、医療・病院管理研究所、それから感染症の口腔科学部のそれぞれがより良い機能をお互いに発揮するということをもって発足したということでもございまして、その前身の時代から考えますと、公衆衛生院は戦前、今から85年前後の歴史を有しておりますし、戦後に発足した医療・病院管理研究所も70年を超える歴史になると思います。この間、こういう形で、国のもとで一つの機関として、人材の育成、研究活動が行われてきたということは大変すばらしいことであると思います。その成果が、例えば今回のコロナの流行という場に、表でも、そして下支えの裏の面でも大いに役立っていることは、心ある人は皆わかっていることでございます。この間にそれに携わられた多くの職員の方々、そして受講されて、働いている皆様に本当に敬意を表する次第でございます。

公衆衛生、あるいは病院管理は大変地味な仕事です。でもこれが公の場できちんと機能するには、常日ごろからの人の育成、研修、研究ということが行われていなければなりません。その仕事を国としてそれを支えてきたこと、そしてそれに参加された多くの方がいたこと、そういったことが今日を迎えた大きな流れになったのだと思います。

残念なことは病院管理の部門が大分縮小してしまって、その結果かどうかはわかりませんが、今回のコロナを見ましても、公衆衛生の部分はいろいろと言われながらもそれなりの体制をきちんと自治体を中心に組まれています。

## 1. 国立保健医療科学院 設立 20 周年記念式典

医療の体制ということについては、私的病院が多いということもありますが、うまく機能しない部分があったという反省が今言われております。そういういろいろな面も考えますと、やはりこういうところできちんと体制をとって、民間の方も研修にお招きしてやってきたことにはそれなりの意義があったと思います。

20 周年ですけれども、これから 30 周年、40 周年、50 周年と、この研究と研修の体制、特に人の育成の体制が今後とも続くことを願いましてお祝いの言葉といたします。本日はおめでとうございます。

### ○ 柴崎光子 氏 (和光市長)

ただいま御紹介をいただきました和光市長の柴崎光子です。本日は記念すべき国立保健医療科学院設立 20 周年記念式典にお招きいただきまして感謝申し上げます。ありがとうございます。地元の市長として一言お祝いの御挨拶をさせていただきます。

本日ここに国立保健医療科学院設立 20 周年記念式典が多くの皆様の御臨席のもと盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。曾根智史院長をはじめ国立保健医療科学院の皆様には、日頃より和光市政の推進に格別の御理解と御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。また、これまで保健、医療、福祉、及び生活環境に関する厚生労働、行政施策の推進を図るため、地方自治体職員等の人材育成や調査研究を行い、我が国の公衆衛生の向上に寄与してきたことに深く敬意を表します。

さて国立保健医療科学院が 2002 年に和光市に設置され、今年で 20 周年を迎えました。和光市には国の研究・研修機関が数多くございますが、国立保健医療科学院につきましては、和光市民大学において医療・保健、介護、福祉など幅広い内容の御講義をいただいております。また、和光市の最上位計画である和光市総合振興計画を初め、地域福祉計画、健康わこう 21 計画などの多岐にわたる計画の策定や新型コロナウイルス専門家会議に委員として参画していただき、専門的な立場で御意見をいただいているところです。さらに令和 3 年 2 月には災害時における施設利用の協力に関する協定を締結していただきまして、災害時には避難所等に利用できる協力体制を構築し、災害時の備えでも御協力をいただくなど、様々な分野で市に貢献をいただきまして深く感謝申し上げます。

最後になりますが、この 20 周年を契機としまして、国立保健医療科学院のさらなる御発展と御臨席の皆様のみますの御健勝と御多幸を御祈念申し上げましてお祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。